四万十川の漁具

平成14年度

㈶四万十川財団

四万十川の漁具 …魚とにらめっこ…

このパンフレットは、四万十川の漁具を紹介するものです。四万十川財団主催の平成14年度「四万十川の移動漁具展」の展示資料から代表的なものを紹介します。

川で漁をする人びとは、日頃から川や魚をよく観察しています。水の深さや流れの速さ、岩についたアユの食(は)み跡（コケを食べた跡）をみたり、足を入れたときに感じた水温から魚の居場所を判断するなど、五感を使って川を知ることを大事にして漁をしているのです。

四万十川で筆者が耳にした「魚とにらめっこしてやってきた」「川を知らんと、魚はとれん」「川は毎日違う」といった各人のさまざまな言葉は、川漁というものが、机上ではなく日々の観察や経験から得られた知識に裏打ちされていることを物語っています。

川漁に使われる漁具も、またしかり、です。人間は漁具を使うことで、素手のときよりも効率よく魚をとることができるようになりました。四万十川流域の遺跡からは、縄文時代の淡水漁撈(ぎょろう)用の石錘(せきすい)が出土しています。そのような長い歴史の中で祖先から伝えられ、新しい工夫が生みだしてきた漁具は、漁をしてきた人びとの知恵の結晶といえます。

四万十川の漁具は、網漁具・釣漁具・雑漁具の３つに分類されます。雑漁具には、カナツキなどの刺突具、筌(うけ)などの陥穽具(かんせいぐ)、ウバサミなどのはさみ具、アオノリカキなどのかき具などが入ります。これらを主漁具として、魚影を見つけるための箱メガネや火振(ひぶ)り漁のイサリなどは副漁具とされます。

同じ種類の漁具でも、上流域・中流域・下流域・汽水域といった河川相や漁の対象とする魚や漁期、作った人の工夫などによって、形や大きさに違いがあり、現在では使われなくなった漁具もあれば、まだまだ現役で作り手、使い手ともに健在な漁具もあります。

また、その形や種類の多様性に驚き感心すること、しきりです。また、竹を使った漁具が多いことにも気づくでしょう。川漁には身近な植物を素材にして漁をする人自身が手作りする漁具が多くあるからです。そうした漁具作りは、素材を切り出すことから始まります。四万十川では、「ツチ（干支の庚午(かのえうま)から甲申(きのえさる)までの15日間）に竹を切ると虫が入るから、それを避けて切る」という、竹を切る時期の言い伝えがありますが、それも「ツチに切った竹は虫が入っていかん（ダメに）なる」と、経験からの言葉として語られることが多いようです。さらに、市販の道具であっても、魚の習性や川の様子にあわせて自分なりに改良し、使うときにも工夫をこらしています。

これらの漁具は、高知県立歴史民俗資料館が平成９年度企画展「四万十川～漁の民俗誌～」時に収集した180点のうちの一部です。四万十川の漁具の収集は、まだはじまったばかり。180点では、四万十川の漁具の全貌はわかりません。さらに500、1000点と収集してこそわかってくることがあると思います。これまでの収集にご協力いただいた皆様、今回の展示にご尽力いただいた皆様に厚くお礼申し上げますとともに、今後ともご協力を賜りますようお願い申し上げます。

「四万十川の漁具」の発行にあたって

平成14年度の㈶四万十川財団の事業内容を四万十川総合保全機構幹事会において検討協議をしている中で、中村市の方から「四万十川の漁具は色々あって面白い、上流、中流、下流で同じ道具でも少しずつ違っている。」との趣旨の発言がありました。この発言を契機として四万十川流域移動漁具展が企画されました。

四万十川の特徴の一つにその流域住民と四万十川が日常の生活の中で深く結び付いていることです。飲み水、農業用水、憩いの場などその例は、枚挙にいとまがありません。その中でも食べて美味しい「あゆ」、「うなぎ」、「えび」、「川のり」などこの流域の住民にとって、現在でも毎日の食卓を愉しく飾り、昔から重要な蛋白源でした。それを採取する道具が漁具です。漁具には、先輩たちが川とかかわって得た知恵が一杯詰まっていることでしょう。この文化を後世に伝えることも今の我々の役割の一つではないでしょうか。

せっかくの展示会ですので、これを一つの記録として残し、流域住民、お年寄りから子供までじっくりとこの流域に伝わる文化の一つである漁具を再発見することにつながるよう願っております。

最後に、漁具の貸し出し、漁具の説明及び漁具の展示方法など、文字通り最初から最後まで御協力を頂いた高知県立歴史民俗資料館に感謝の意を表します。

また、この事業は㈶河川環境管理財団の助成がなければ実現できなかったことを読者の皆様に御報告し、同財団の関係者の方々に深く御礼を申し上げる次第であります。

平成14年12月吉日

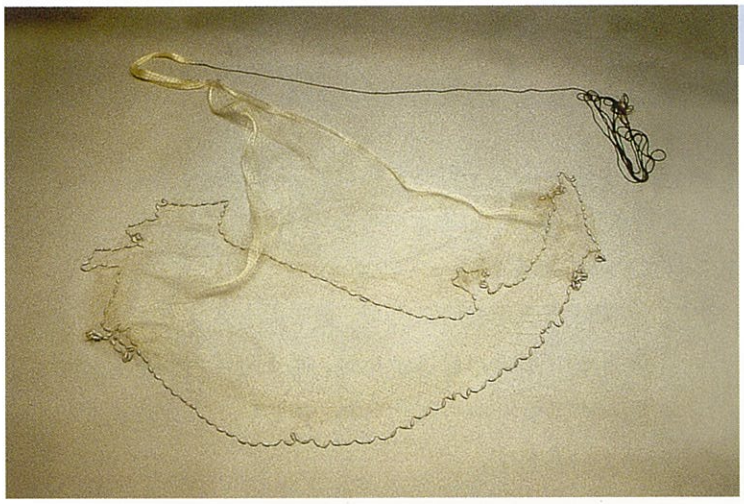
財団法人　四万十川財団

この本は㈶河川環境管理財団の河川整備基金の助成を受けて製作しました

あみぎょぐ 網漁具

網漁具は、漁網、浮子（うき）、紐からなる。川漁では、既製品の漁網を反で買い、それを自分で仕立てたり、修理する人が多い。引き伸ばした状態で網目が五寸のうちに何目入るかで、8つなら「ヤフシ」、9つなら「ココノフシ」と呼ばれる。

上から魚に覆（おお）い被（かぶ）せるようにうつ投網（とあみ）やあらかじめ川に張っておく張り網、下から魚をすくいあげるスクイダマなど、漁法によって異なるさまざまな網がある。

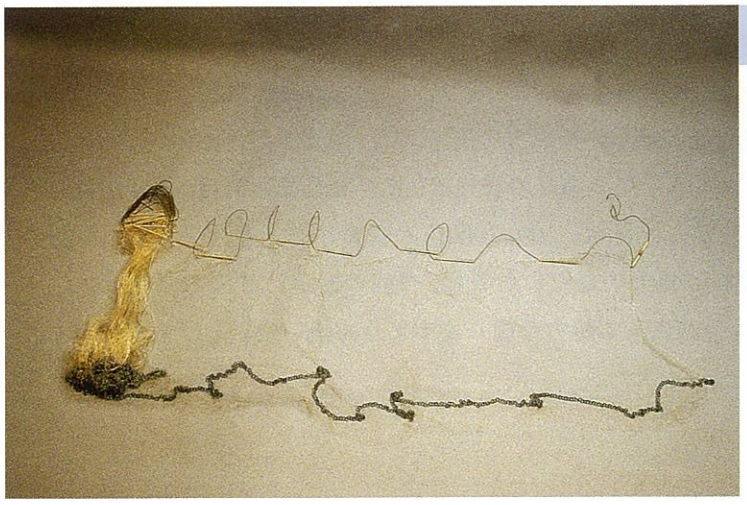


投　網　上流域

アユなどをとる網。浮子はなく下端に錘（おもり）がつく。船または徒歩で投網をうち、河床に錘がついたら、網の上端の紐を引っ張って網をあげる。夏から秋、禁漁期間をはさんで秋から冬にかけての漁。

投　網　下流域

アユなどをとる網。錘が鎖状（くさりじょう）である。上流域の投網の長さが2m50cmなのに対してこの下流域の投網は長さが4mある。裾回（すそまわ）りも20mと大きい。下流や汽水域付近では、集団で順に投網をうつマワシウチが行なわれている。

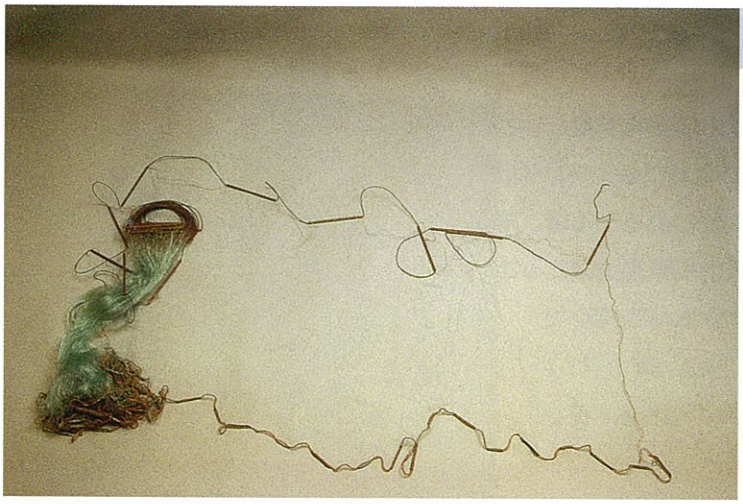


投げ網　上流域

アユなどをとる網。上端に浮子、下端に鎖状の錘がつく。バラス（砂利）の川原から投げ網をなげる。夏から秋、禁漁期間をはさんで秋から冬にかけての漁。

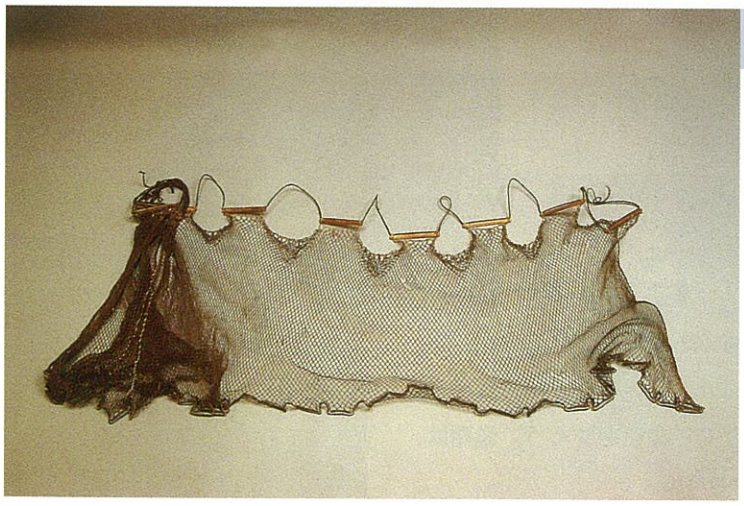
建網（刺し網）　中流域

アユなどをとる火振り漁の網。船から淵や静などへ静かに網をおろし、火を振って網に魚を追い込む。集団でも一艘でも行なう。夏から秋、禁漁期間をはさみ秋から冬にかけての漁。上端に木製の浮子、下端に鉄製の錘がつく。



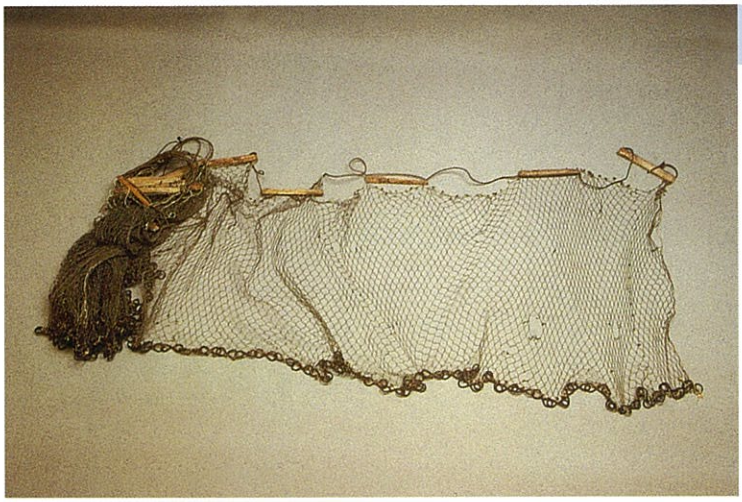
建網（刺し網）　下流域

アユなどをとる火振り漁の網。浮子は塩化ビニール管で、下端に鉄と鉛の錘が交互についている。解禁日以降、下流で何艘も船が出る火振り漁は圧巻。



張　網　下流域

アユをとる網。上端に浮子、下端に錘がつく。上流と下流に張り、水中メガネをのぞいてアユを見つけてカナツキで突く。また、水面を叩いて脅し、アユを張り網にかける。漁期は5月中旬～8月。

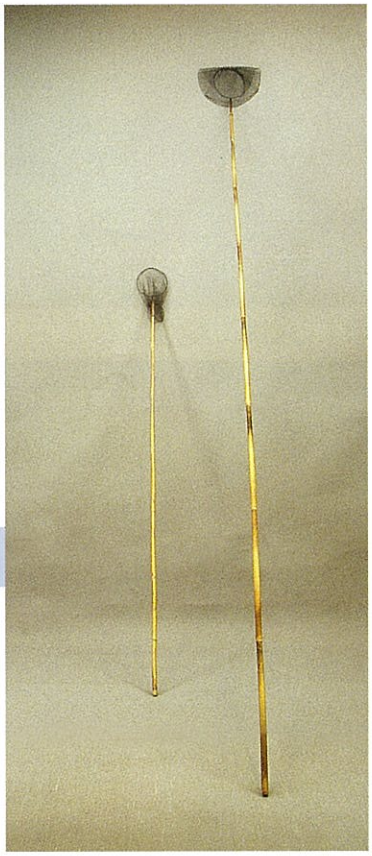


鯉　網　下流域

鯉をとる網。上端に浮子、下端に錘がつく。この網でコイの行く手をはばみ、船の上からカナツキで突きとる。漁期は10～3月。

ニゴリクミ　下流域

大雨でオキの流れが激しいときに、比較的流れがゆるやかな川縁に寄ってきた魚をとる網。岸から川に入れて魚を掬(すく)いとるために長い柄(え)がついている。



エビタマ　中流域

エビをとる網。網の部分は小さく、長い柄がついている。夜、ガスランプを持って川に行き、エビタマでエビをすくう。漁期は、6～9月頃。

ウケダマ　上流域

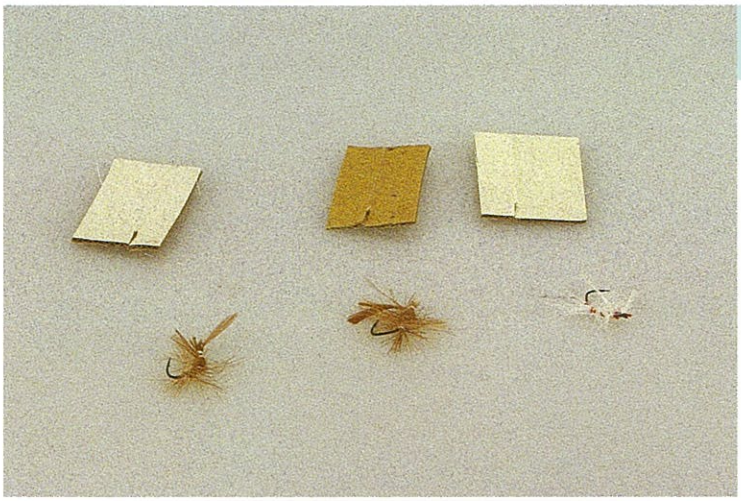
アユの釣り漁などで、竿をあげたときに、釣り針にひっかかった魚を受け止める網。ニスを塗って美しく仕上げている。

スクイダマ　汽水域

柴漬(しばづ)けでウナギやエビをとる網。柴は椎(しい)やヤマモモの枝の束。漬けておいた柴をあげるときに、このスクイダマを柴の下に敷き、柴をゆすってスクイダマの中にウナギやエビを落とす。3月下旬～11月の漁。山に入ったときに二股になった木をさがして自分でつくる。

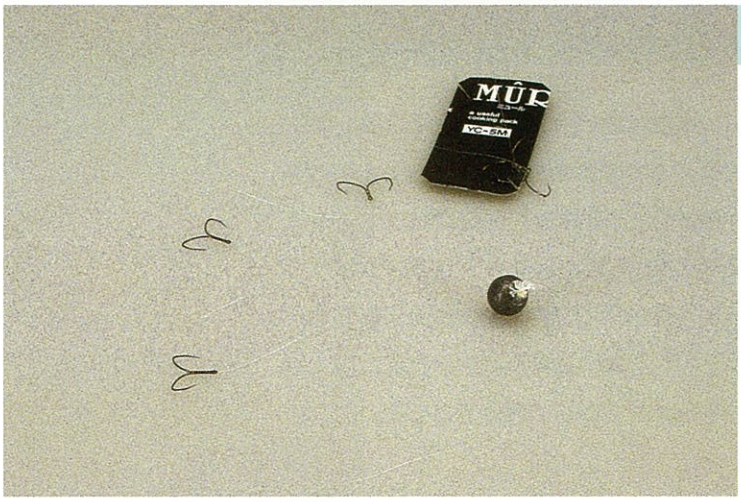
つりぎょぐ 釣漁具

釣漁具は、釣針、糸、竿、沈子（おもり）、浮子、餌から構成されるが、これらのいくつかは欠くことがある。例えば、アユを引っかけてとるボウジャクリには浮子がないし、餌もつけない。ウナギのハエナワには竿がない。



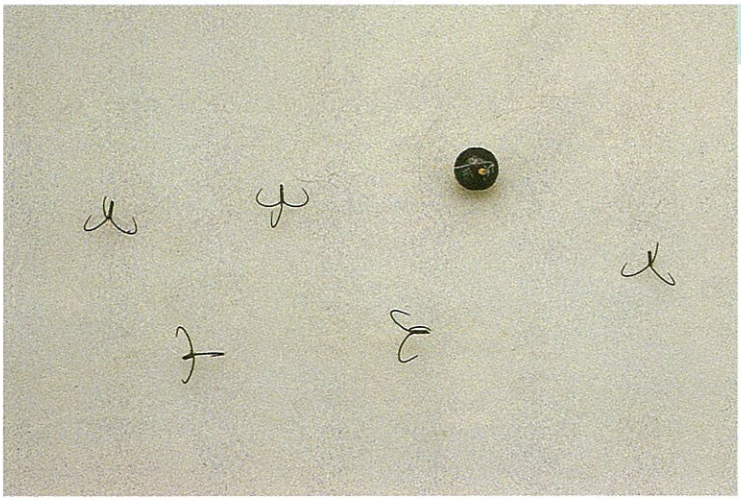
毛鉤　上流域

アマゴのトバシ漁に使われる釣漁具。毛鉤は餌の代わりで、針に鶏の羽根を付けて虫に見せかける。4月～5月20日頃は白い羽根、その後は茶色の羽根を使う。川下で竿を構え、上流から下流へ向けて引っ張る。手首を使って竿の先を動かし毛鉤を生きた虫に見せる。



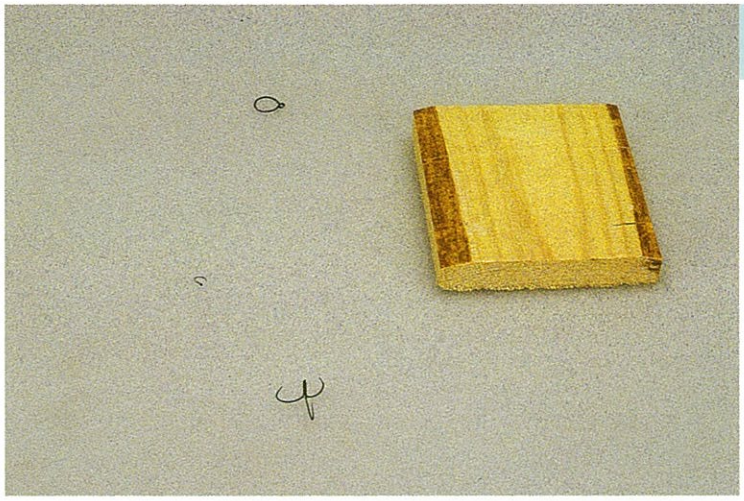
シャビキ用釣り針　上流域

アユのシャビキ漁に使われる釣り針。長い竿に付けられる。シャビキ漁は、錘が川底を転がる音などに驚いて動くアユをとる。2つの釣り針を接合した形で、1本の糸に5つ取り付けている。丸い鉛の錘がついている。



シャビキ用釣り針　中流域

アユのシャビキ漁に使われる釣り針。長い竿に付けられる。洪水で川が増水した時に使う。3つの釣り針を接合した形で、1本の糸に5つ取り付けている。丸い鉛の錘がついている。



友掛(ともが)け用針　中流域

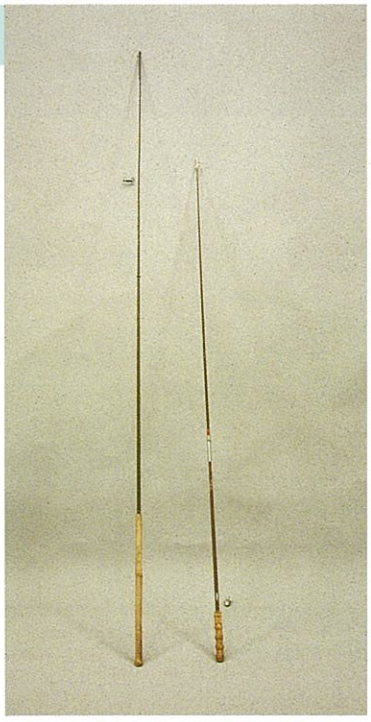
友掛け漁は一般的に、なわばりに侵入した他の魚を追い払うアユの習性をいかした漁で、オトリアユを使う。オトリアユに取り付けるハナカンと獲物をひっかけるための3本のイカリ型の釣り針。

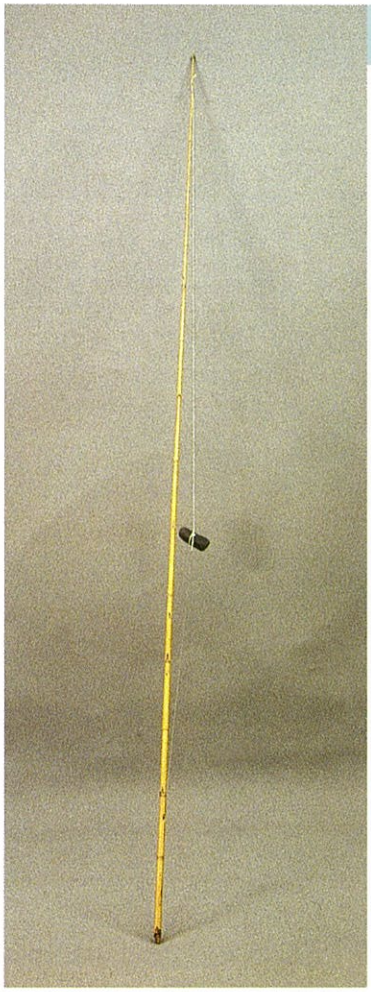
アユ友掛け模型　中流域

友掛け漁は一般的に、なわばりに侵入した他の魚を追い払うアユの習性をいかした漁で、オトリアユを使う。中流域を中心に、石付きになったアユをとる。下流域では、産卵する頃に雌をオトリに使って色仕掛けで雄をたぶらかす珍しい漁もあるという。

ボウジャクリ　上流域

箱メガネでアユの姿をみつけ、長い柄の先についた釣り針に引っかけてとる。左は魚がかかったら柄から釣り針がはずれる仕掛け。右は釣り針の間近に錘がつき、アユを釣り針に引っかけてとる。



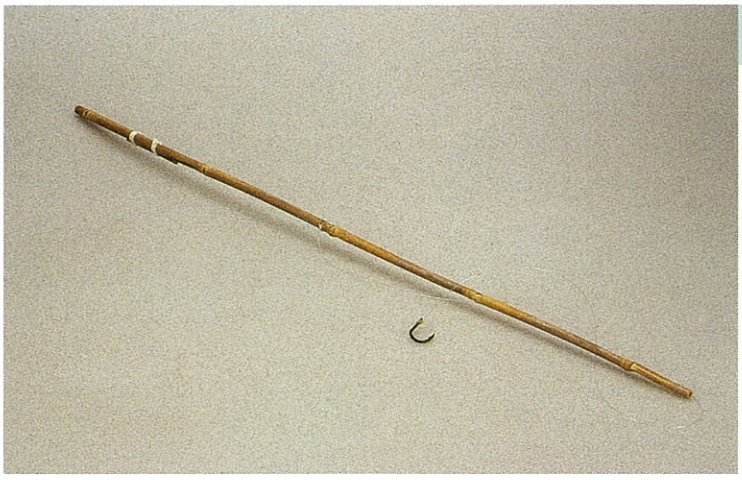


一本ツケ　中流域

ウナギをとる釣漁具。竿に綿糸をつけ、綿糸の先に釣針と錘をつけている。餌はエビやハヤなど。流れが少しあるような岩場の岸に竿を立てておく。ウナギはこどものいい小遣い稼ぎにもなった。

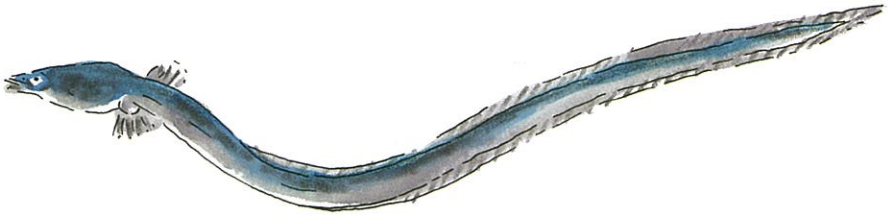
ウナギジャクリ　中流域

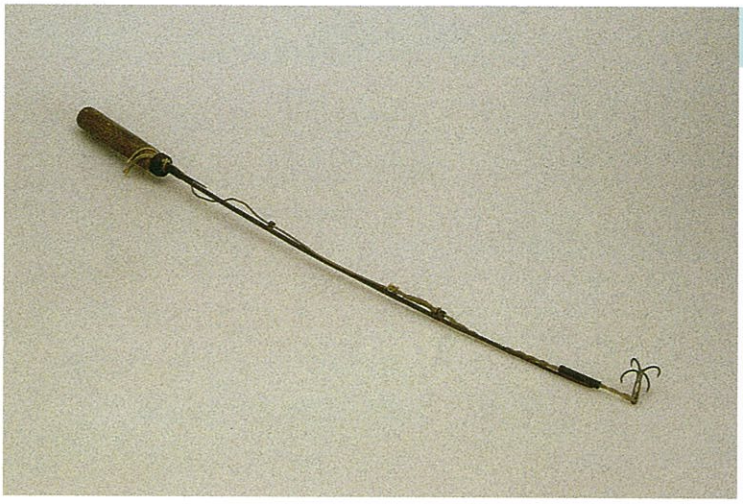
ウナギをとる釣漁具。竿の真ん中近くに綿糸をつけ、綿糸の先に釣針がつく。釣り針は村の鍛冶屋が作った大振りのもので、竿の先端に取り付け、魚がかかったら竿から釣り針がはずれる仕掛け。



ウナギジャクリ　中流域

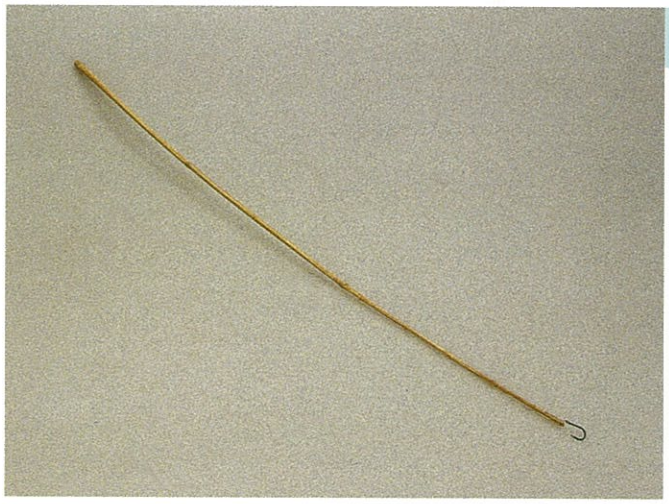
ウナギをとる釣漁具。竿の先につけた釣り針に引っかけてとる。魚がかかったら竿から釣り針がはずれる仕掛け。竹竿の中を糸が通り、あまった糸は手元の「ヤマ(糸)止め」にとめておく。





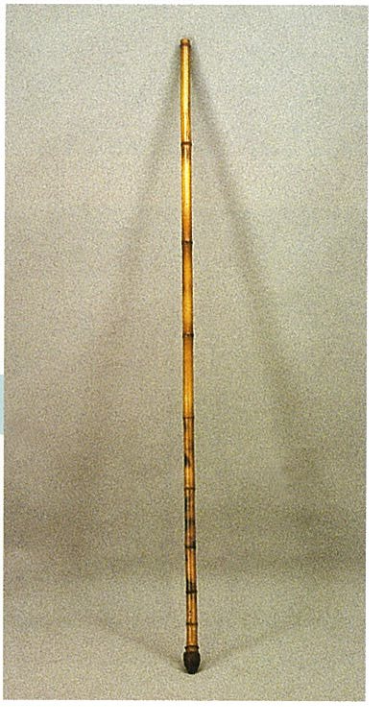
ウナギの引っかけ　下流域

ウナギをとる釣漁具。竿の先についた釣り針に引っかけてとる。魚がかかったら竿から釣り針がはずれる仕掛け。竿が鉄製で、糸を通す筒もついている。握(にぎ)りやすい柄(え)もついた機能的な形をしている。



ヒゴ釣り　中流域

ウナギをとる釣漁具。ヒゴは文字通り竹のヒゴで先端に釣針をつけている。釣針に餌のミミズなどをつけて田や川の穴にこもっているウナギを誘い、食いついたら引っぱり出す。

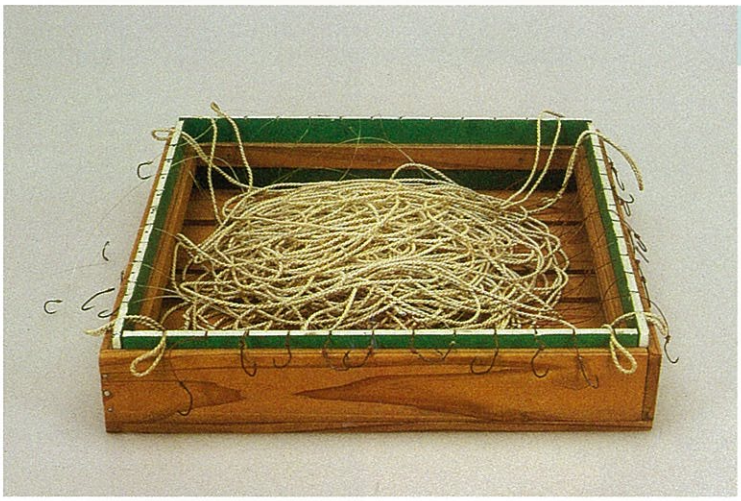


ヒゴ入れ　下流域

ウナギをとる釣漁具のヒゴを入れる。これに魚籠(びく)のウナギカゴの紐を引っかけ、肩に担(かつ)いで漁場に出かけた。竹の根の部分を生かし見栄(みば)えも考えて作られている。

ハエナワ　中流域

ウナギをとる釣漁具。10、20mくらいの縄に釣針のついた糸を何10本もつける。縄の両端には錘の石をつけ、一方の石には浮子をつけて目印にしている。ハヤやゴリ、ミミズなどの餌を釣針につける。漁期は4月～11月頃。上流域から汽水域まで広くみられる漁具。



ハエナワ　中流域

ウナギをとる釣漁具。ハエナワは釣り針を箱のまわりの刻み目に1つずつはさんで片付けるが、このハエナワは木箱の中に発泡スチロールの板を立て、それに刻み目をつけて釣り針をはさむようにしている。

ハエナワ　汽水域

ウナギをとる釣漁具。汽水域では、ハエナワの他、柴漬けや石グロ、コロバシなどでウナギをとる。また、汽水域の漁は潮の差し引きをみて行なわれる。

ざつぎょぐ 雑漁具

筌は、魚が一度入ったら出られないコジタ（カエシ）という仕掛けがあるものと無いものの２つがある。コジタのある筌は、入口を下流に向けて流れ出る餌のにおいで魚を誘う。コジタのない筌は、上流に入り口を向けて漬けるもので、入った魚は水圧で出られない。筌は、四万十川では○○カゴや○○ジゴク、○○ウエや○○ブシなどと呼ばれており、○○の部分には、主な漁獲対象とする魚名が入る。

この他に、カナツキなどの刺突具、アオノリカキといったかき具などを紹介する。

イダブシ　上流域

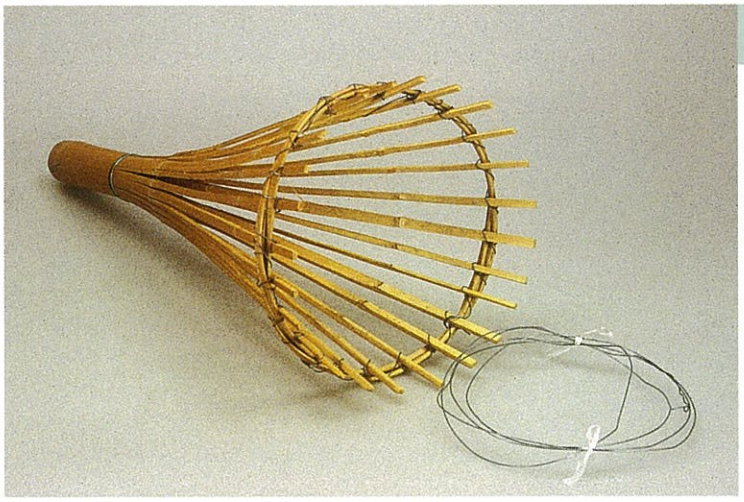
イダ（ウグイ）をとる筌。10月から12月頃までの寒イダの時期に、サナギとヌカと赤土を練った餌を入れて魚を誘う。餌の匂いが流れるように入口を川の下流に向ける。夕方漬けて朝引き上げる。

ハヤジゴク　上流域

ハヤをとる筌。5月中旬から8月までの漁。餌はヌカと田泥と醤油滓を混ぜたもの。水が静かに回るような流れのトロいところに漬ける。川底にすわりが良いように底が平になっている。

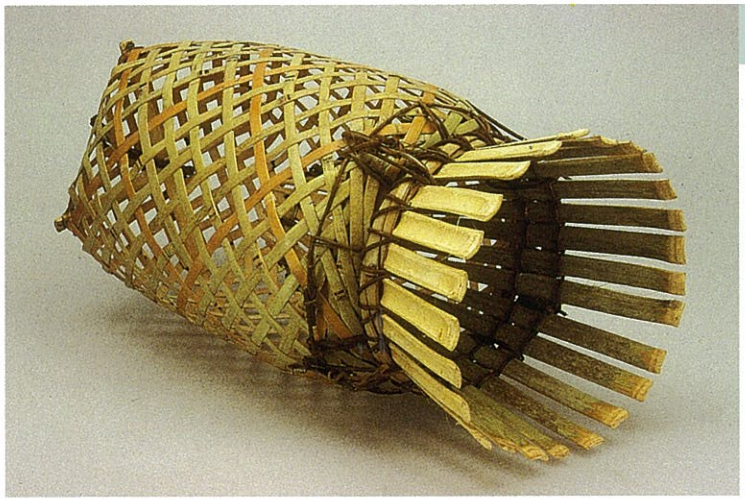
ハヤジゴク　中流域

ハヤをとる筌。カニも同様の筌でとるが、入口部分のコジタの形がそれぞれ異なる。木の浮子と石の錘がついている。浮きは筌本体を浮かすものではなく、沈めたときに川面に浮いて目印となる。



ワリコ　中流域

アユやハヤ、イダなどをとる。竹を割りラッパ状に入口を広げた筌。流れが急な所、岩と岩の間や田の水戸などに仕掛ける。水圧で逃げられなくなるから餌はいらない。



カニカゴ　上流域

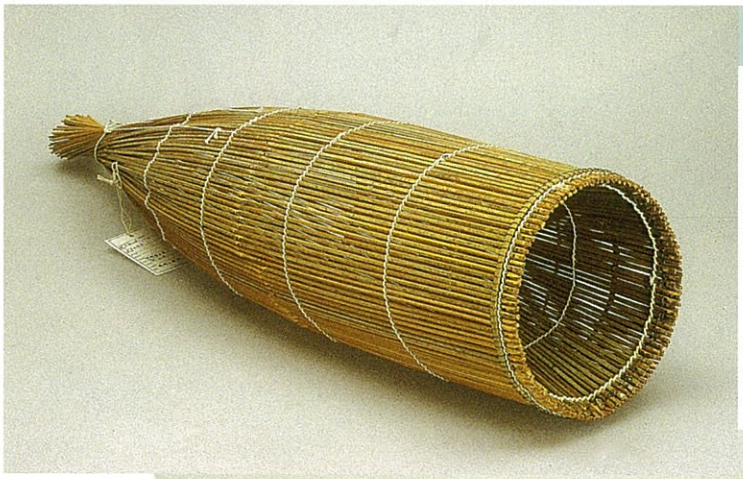
ツガニ（モクズガニ）をとる筌。クズバの花が咲いたらカニが下るといい、産卵のためにカニが川を下る9月頃から入口を上流に向けて餌無しで漬ける。

カニカゴ　中流域

ツガニをとる筌。入口を下流に向けて中に餌を入れて漬ける。餌は穴を開けた空き缶に入れてカニカゴの中に紐で吊す。錘を付けて沈め、竹の筒で作った浮きなどを付けて目印にする。

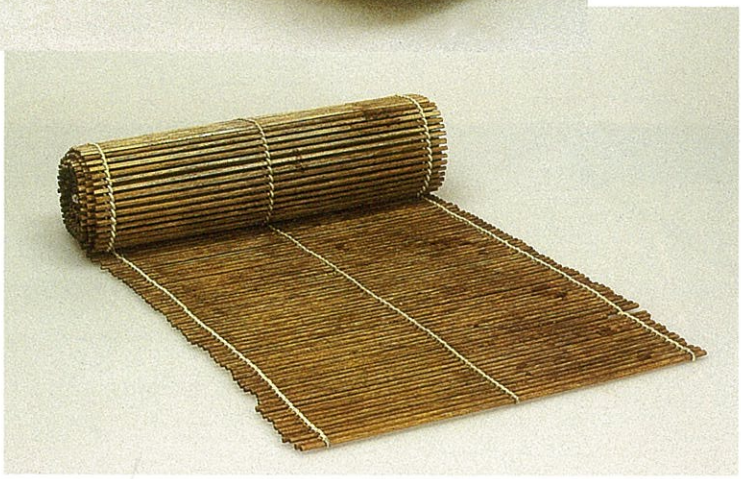
カニカゴ　中流域

ツガニをとる筌。鉄の枠にナイロン製の網をとりつけた新しいタイプのカニカゴ。鉄の錘をつけており、カニの入口は2ヶ所ある。



ゴリのウエとタテズ　下流域

ゴリ（ヌマチチブ他）をとる漁具で「登り落とし筌」という。流れが速い瀬の端に仕掛ける。タテズに添って登ってきたゴリが自然とウエの中に入ってしまう。川漁師がかつての漁具を復元したもの。



ゴリのウエとタテズ　下流域

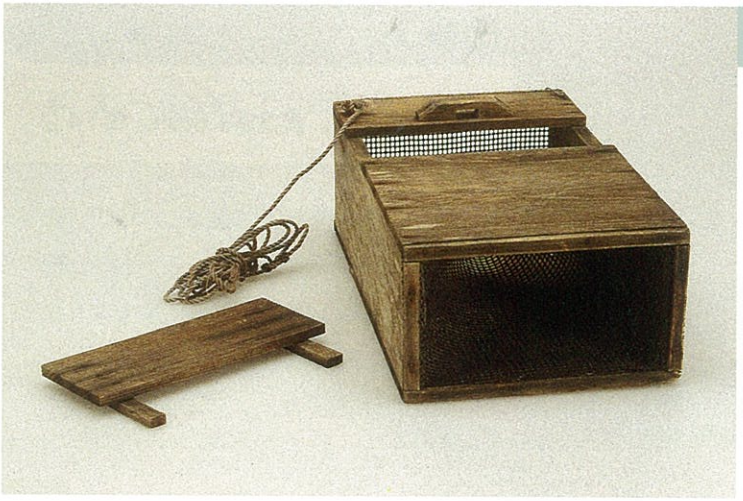
ゴリをとる「登り落とし筌」という漁具。鉄枠に金網をはった新しいタイプのもの。

ブッタイ　上流域

竹ひごを簾(す)状に編み、一方を閉じて柄をつけ、一方を広げて入口にした漁具。笹を束ねたホテや足でゴリをおどして、ブッタイに追い込む。

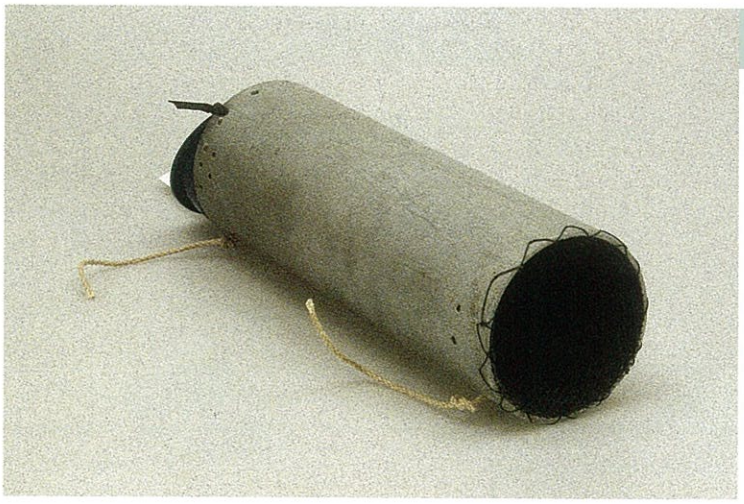
チヌカゴ　汽水域

チヌ（クロダイ）をとる筌。竹の丈夫な皮の部分で使っているため、竹ヒゴが細くても丈夫である。底に田土を重しに敷き、その上に臼で搗いたカニと土とを混ぜた餌を入れる。チヌカゴを3、4つ漬けると家で食べるくらいとれたものだという。



エビウエ　下流域

エビをとる筌。木製の筌で、中に餌としてヌカを入れる。ヌカは目の粗い袋に入れて匂いを流れ出させエビを誘う。入口のコジタは固定式なので、上部にフタを設けておりそこからエビを取り出す。



エビウエ　中流域

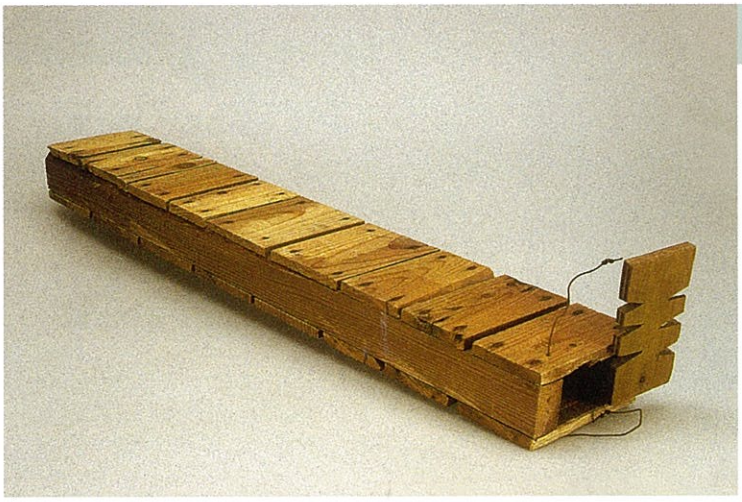
エビをとる筌。近年作られた塩化ビニール管の筌で、ハエナワ式に数10個漬けられている。中に餌としてヌカを入れる。

いろいろな ウナギ筌

ウナギをとる筌には3種類ある。①板で作った箱状の筌、②竹筒の形をいかした筌、③竹ひごを編んだ竹籠状の筌である。①と②は春先から梅雨にかけてミミズを入れて浅いところに漬け、③はアユやハヤを餌にして深いところへ漬け、川を下る頃のウナギをとる。また、上流の筌が大きく、下流の筌ほど小さい傾向にある。比較するためにそれぞれの筌の大きさを掲載した。

ウ　エ　上流域

③のタイプ。長さ93cm。径15cm。



箱ウエ　上流域

①のタイプ。長さ93.5cm。幅14.2cm。

入口はプラスチック製のコジタで、後部に木製のフタを設けている。フタは開け閉めしやすい作りで、ウナギを取り出しやすい。

ウナギ用タケブシ　上流域

③のタイプ。長さ69cm。径9.5cm。

竹ヒゴを竹で編んだタガでとめている。後部をタガで閉じている。タガをはずして捕れたウナギを取り出す。

ウナギジゴク　中流域

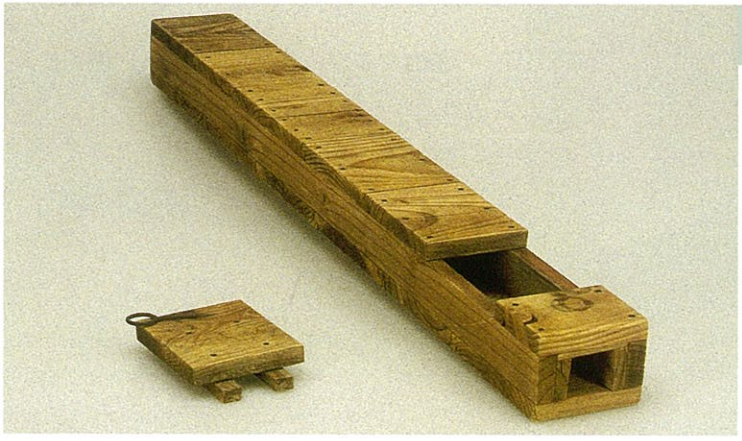
①のタイプ。長さ82cm。幅13.5cm。入口の幅が広く、後部へいくに従って狭い形をしている。

コロバシ　中流域

②のタイプ。長さ82cm。径5.5cm。竹で編んだコジタ。後部は竹の節(ふし)をいかして密閉式にしている。節には小さい穴を開けて水流を止めないようにしている。コジタをはずしてウナギを取り出す。

コロバシ　中流域

②のタイプ。長さ79cm。径5.5cm。プラスチックを使ったコジタ。



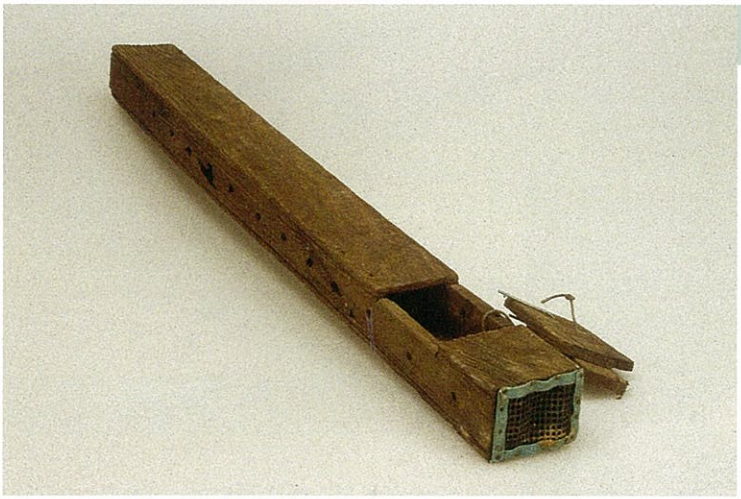
箱ウエ　中流域

①のタイプ。長さ66cm。幅7.5cm。プラスチック製のコジタ。捕れたウナギを取り出すために開閉のしやすいフタが上部についている。

ウナギカゴ　中流域

③のタイプ。長さ78.5cm。径7.2cm。

コジタが本体と一体化している。後部が開いており、漬けるときには草を丸めて即席にフタをしたり、木製の栓をつくっていたという。



ウナギモジ　下流域

①のタイプ。長さ75cm。幅6.8cm。

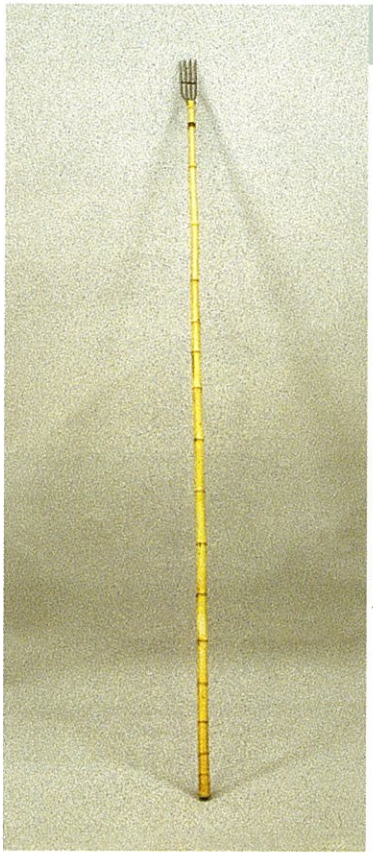
プラスチック製のコジタ。捕れたウナギを取り出すために開閉のしやすいフタが上部についている。写真は後部からみたところ。

コロバシ　汽水域

③のタイプ。長さ61.8cm。径4.6cm。

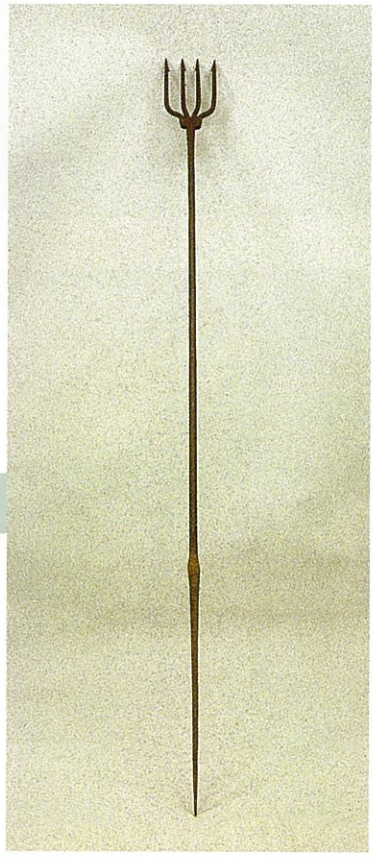
プラスチック製のコジタ。

刺突具



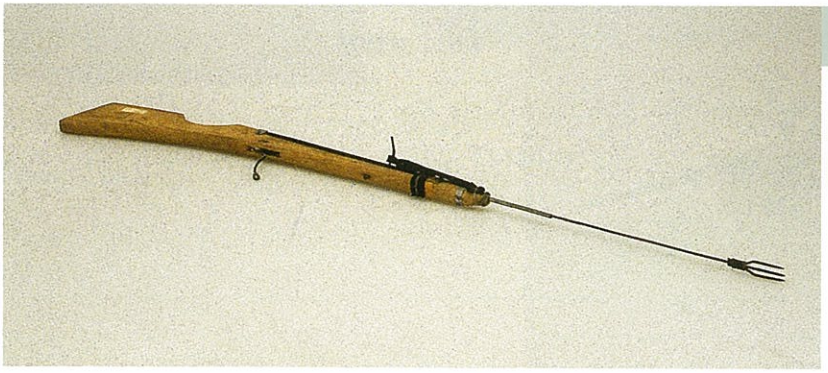
カナツキ　中流域

アユをとる刺突具。アユの張網漁で、水中メガネでアユをみつけ突きとる。



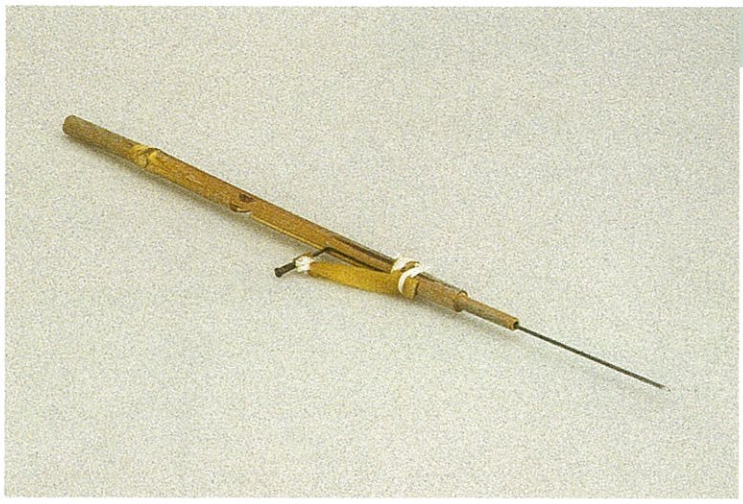
コイのカナツキ　中流域

コイをとる刺突具。船の上から箱メガネでコイの姿をみつけ、カナツキで突きとる。カナツキの柄には長く丈夫な竹を使う。かつては冠婚葬祭や祭りに使われたためコイには商品価値があった。



水中銃　中流域

エビをとる刺突具。水中眼鏡で川底をのぞき、岩の間などにじっとしているエビをみつけ、水中銃で突きとった。こどもの頃、夏休みの川遊びに使ったもの。



エビツキ　中流域

エビをとる刺突具。

エビツキ　中流域

エビをとるカナツキ。

水中銃　中流域

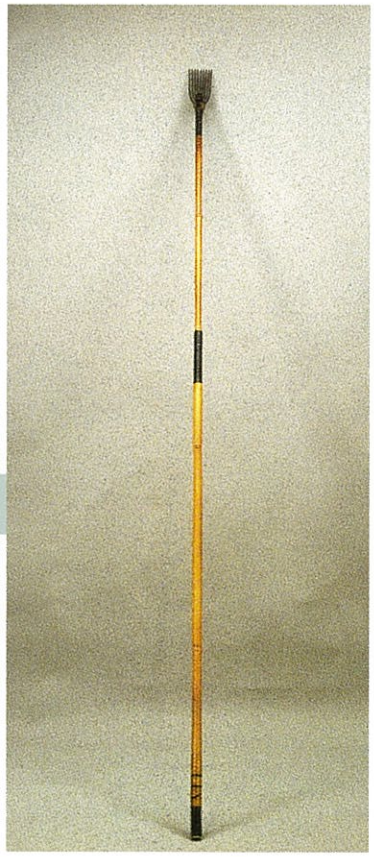
刺突具。FISHING GAN KINGの商標あり。大阪製。

水中銃　中流域

刺突具。手作り。ボールペンを使用

ウナギ用カナツキ　中流域

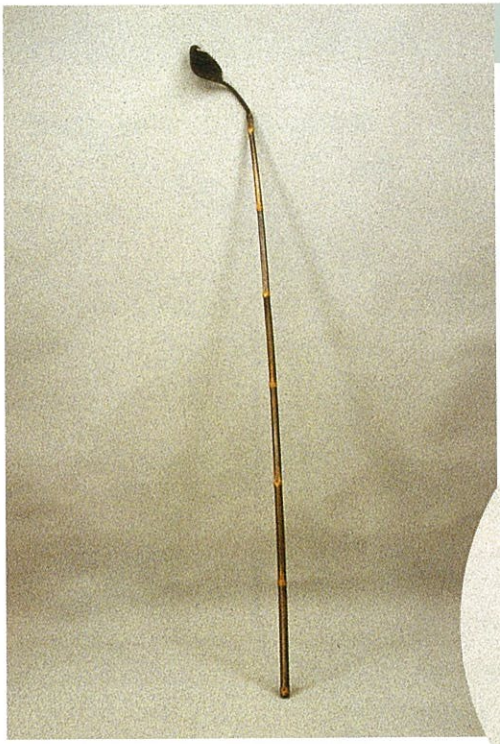
ウナギをとる刺突具。刃の部分は鍛冶屋が鍛造した精巧なつくり。5つの刃先のうち周辺の4つにはカエシがあり、真ん中はネジ状になっている。頑丈な柄をつけている。



カナツキ　中流域

アユをとる刺突具。刃は9本ついている。

かき具

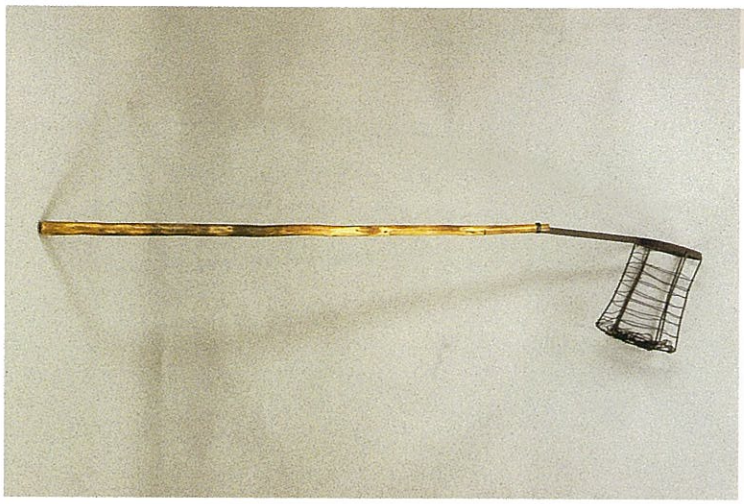


アオノリカキ　汽水域

汽水域でよく繁殖(はんしょく)するアオノリ(スジアオノリ)をとるかき具。潮のひきを見計らって漁に出て、船の上から、または徒歩で川に入ってアオノリカキでかきとる。とって帰ったアオノリは水で洗って、翌朝天日干しする。10月末～2月末と5月頃の漁。

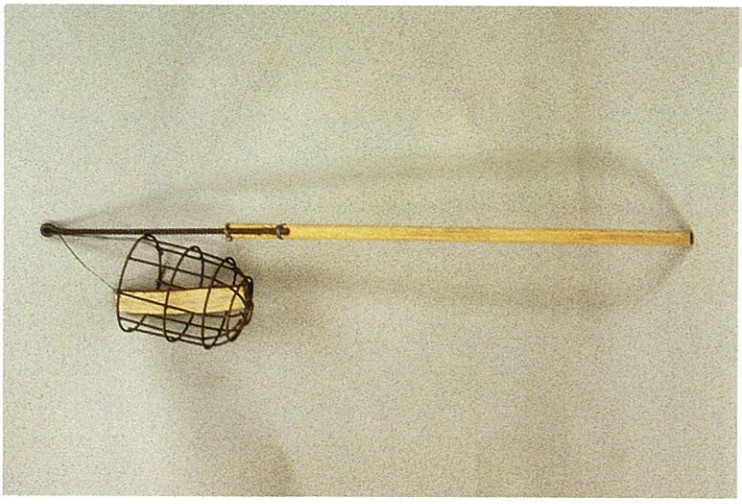
ふくぎょぐ 副漁具

網漁具・釣漁具・雑漁具などを主漁具とするのに対して、魚影を見つけるための箱メガネや火振り漁のイサリなどは副漁具とされている。ここでは、他に魚籠や網針も紹介する。



イサリ　中流域

火振り漁に使う。松明（たいまつ）の炎が川面を照らすと、その光に驚いた魚が網に掛かる。松明のイサリは昭和40年代までは主流であったが、その後、カーバイト、電球へと移り変わっていった。



イサリ　下流域

カゴの部分が柄に吊り下げられる形で、大きく揺れる。カゴの中に松明を入れる。

箱メガネのいろいろ

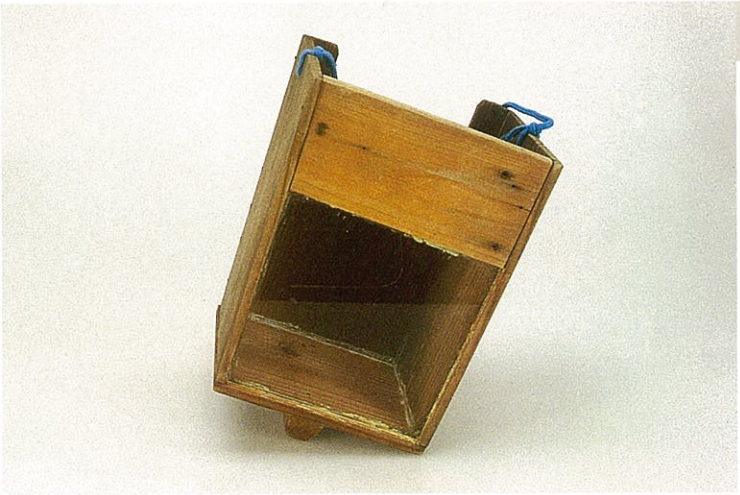
魚を探索するための漁具。板の箱の一面にガラスをはめ込んでいる。漁法やとる魚の生態の違いによって、人が箱メガネを用いるときの姿勢が異なり、それが箱メガネの形の違いに反映している。

箱メガネ　中流域

アユのシャクリ漁やピンピン漁に用いたもの。こどもの頃に水中銃で遊ぶときにも使った。下流から泳いでくるアユをみる。

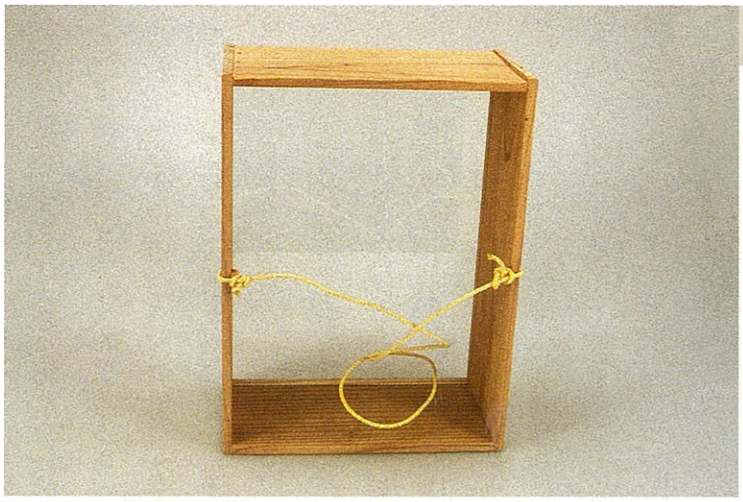
丸メガネ　中流域

アユ漁のシャクリ漁などに用いたもの。ブリキ製。



箱メガネ　中流域

アユ漁のシャクリ漁などに用いたもの。木製。



箱メガネ　中流域

ゴリをエビタマで一匹ずつすくう漁に使ったもの。箱メガネでゴリを見ながら。徒(かち)で川に入り、川底を足でかいて水を濁らせるとゴリが岩に登るので、とりやすかった。ゴリはハエナワの餌にした。

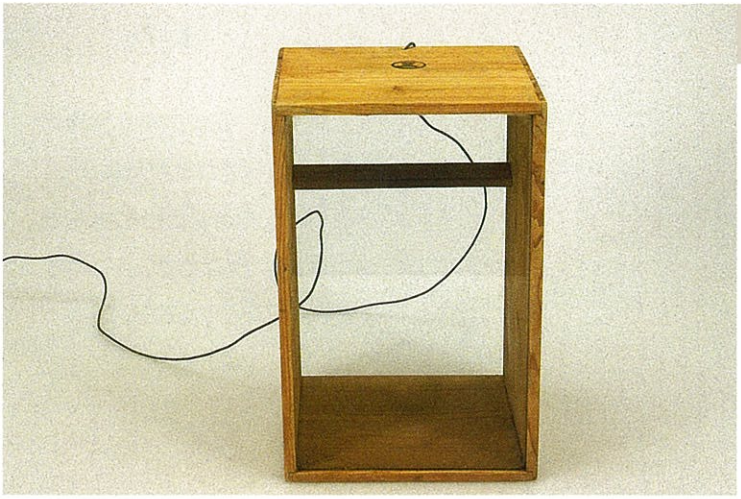
箱メガネ　中流域

アユ漁のシャクリ漁などに用いたもの。木製。顎(あご)と額(ひたい)の大きさに合わせて木を削(けず)っている。

水中メガネ　左:中流域 右:下流域

左はアユ漁のシャクリ漁などに用いたもの。

右はアユの張り網漁に用いた。



箱ビン　下流域

寒鯉漁に使われたもの。船の上から箱ビンでコイを見てカナツキで突きとる。

ミミズバコ　中流域

ハエナワの餌などに使うミミズを入れる箱。

魚籠（びく）

ハケゴ　中流域

とった魚を入れる魚籠。フタはヒモで本体に結びつけられている。

ウナギカゴ　中流域

とったウナギを入れる魚籠。ウナギが飛び出さないよう、丈夫な木製のフタがついている。

エビカゴ・アユカゴ　中流域

とったエビやアユを入れる魚籠。フタをしたままアユなどを入れられるようにフタに適する大きさの穴を開けている。

オトリカン　中流域

友掛け漁に使うオトリアユを入れておく魚籠。入口に網をつけ、フタ替わりにしている。

マンジュウカゴ　下流域

とったウナギを入れる魚籠。ウナギカゴともいう。ウナギのヒゴ釣りでヒゴ入れの竹筒にこのマンジュウカゴのヒモを引っかけて担いで漁に行った。

オクビ　下流域

とったアユなどを入れる魚籠。首が細くなっている。腰につけるヒモを通す工夫がされている。

エンシュウカゴ　汽水域

ウナギを運ぶカゴ。ウナギを大阪へ出荷していた頃に使っていた。

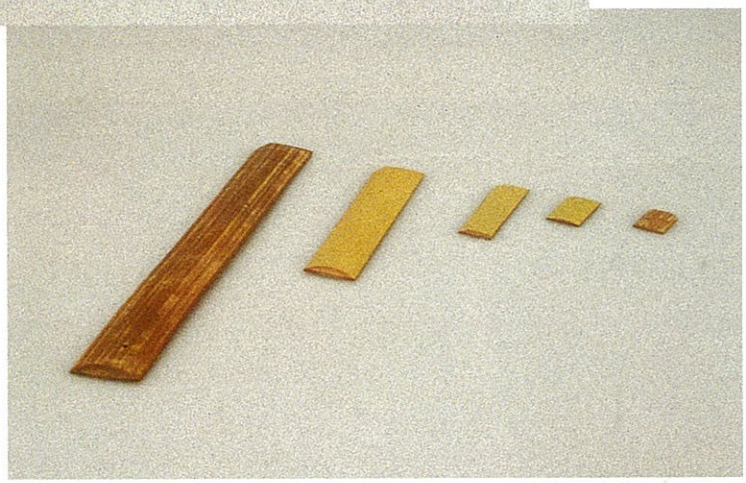
ドウマルカゴ　汽水域

とったウナギを生かしておくイケス。口径52cmと大きい。たくさんのウナギを大阪へ出荷していた頃に使っていた。

網針 その他

網針と目板　下流域

網をつくったり修理するための道具。網の目の大きさを決める目板と、網を編むための網針。投網を編むときには半製品を漁具店で買ってきて、網の上の方は網目をあらくして自分で編み足し、水の抵抗を少なくするなどの工夫をする人もいる。

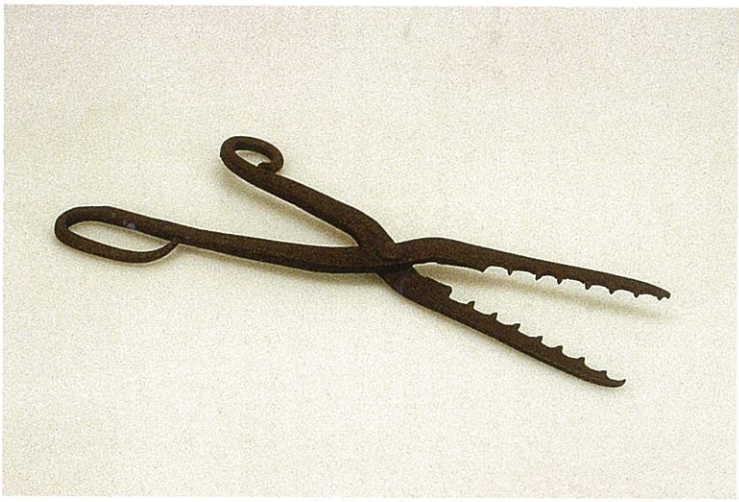


イワの型　下流域

網の錘（イワ）をつくる道具。溶かした鉛をこの型に流し込んでつくる。この型では一匁（もんめ）と一匁五分の2種類の重さのヒルと呼ばれる鉛のイワができる。

カーバイト　中流域

夜、川に行くときに明かりとして使った。



ウバシ(ウバサミ)　下流域

ウナギをはさんでとる。6～9月頃。夜、田んぼや川へ行ってウナギをはさんだ。夜に川に行くことをヨカワといった。ウバシが出来るまでは鋸(のこぎり)でウナギを叩いてとった。

漁の鑑札(かんさつ)　汽水域

大正11年(1922)に幡多郡八束村(やつかそん)役場(現・中村市)が発行したもの。

「四万十川流域移動漁具展」

会場と会期のご案内

■ 東津野村役場	2002	11/28～12/ 4
■ 窪川町四万十会館	2003	1 /24～ 1 /28
■ 西土佐村ふれあいホール		2 /19～ 2 /22

高知県立歴史民俗資料館では、
四万十川の漁具の収集を続けています。
ご協力をよろしくお願い申し上げます。

「四万十川流域移動漁具展」の資料に関する小冊子

発　行　日　2003年１月20日
執　　筆　高知県立歴史民俗資料館　主任学芸員　中村淳子
南国市岡豊町八幡1099－１
TEL 088－862－2211　FAX 088－862－2110
発　　行　財団法人　四万十川財団
高岡郡窪川町琴平町３－14
TEL 0880－29－0200　FAX 0880－29－0201
印　　刷　共和印刷株式会社